Fukinshin na hōseki / [yakusha Tankikan Shujin].
A62 J36 1929 Jap
5328395
0030471746 4
fukinshinnahosekoode
Japan
2/14/13
188

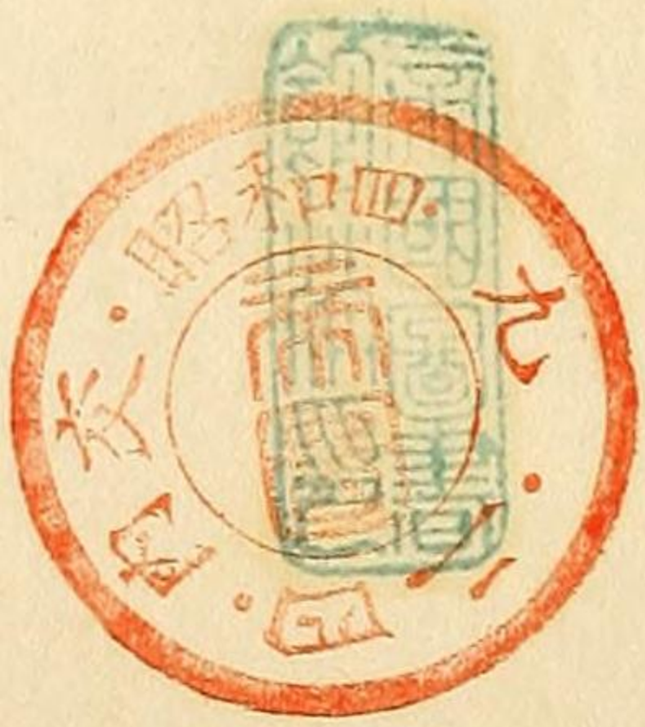
風俗
202

風俗
302
亟
弘
永久保存

LIBRARY OF CONGRESS

Diderot, Denis

不謹慎な寶石



PQ 1979
.A62J36
1929
Asian
Japan
Case

98-838310

596-86

序

此書は若い男の莫迦げた行ひを書いたものである。そして賭事の連續として、一人の氣むづかし屋の情婦に對して、世の中に『息子のクレビヨン』を作ることよりもいつとたやすいことはなく、又一つの輕い小説の中に、あてつけや、自由奔放な情景以外のものも盛ることが出來ると云ふことを示さうと云ふ慾求の下に書かれたものだ。ヂイデロはその賭に勝つた。此の『不謹愼な寶石』は、アカデミイ・ラフンセーズのメジエール氏の下した批評以上に優れたものである。

メジエール氏は、レッシングが獨逸の劇界に齎らした種々の改革に就いて語るに、次の様な言葉を以てしてね

る――

『……我々は、恁うした佛蘭西に對する非難の内から、唯一人の獨創的な思想家を除外する必要がある。其の人とは、レッシング以前に於て、自國の風情に對して完全に批判を加へ、而もレッシング自身が自分の先輩とし、且つ批評に於ける先生として崇めてゐる人である。彼の名はディデロと云ふ。獨逸國民は今日、彼がレッシングに與へた影響を認めないわけには行かないのである。のみならず、獨逸の批評家として（大きな聲では云へないが）、レッシングは彼の告白によれば、佛蘭西の劇界に對する彼の論說の一部に於て、ディデロに負ふ處頗る多く、而もディデロの示した手本が無かつたならば、劇評に於て、あの樣に大膽に、又あのやうに透徹した論評を試み

ることは出來なかつたであらうと云ふことである。レッシング自身もこの事は明かに自認してゐるのである。ヂイデロが重大な問題を惹き起こした『大して價値もない此の一篇の小說』と題する著作に於て、佛蘭西の悲劇をこつぴどく批判してゐた頃は、レッシングはまだライプツチヒ大學の、渺たる一大學生に過ぎなかつた。レッシングは此の『不謹愼な寶石』に心打たれたあまり、二十年後に、それをすつかり彼の『劇作法』の中に飜譯し、之を以て彼の佛蘭西戲曲に對する攻擊の出發點としてゐる……』

この『重大なる問題』と云ふ一語は、此書を責むるに急なる人々の反省を促すには恰好な言葉だ。然らば『重大なる問題』とは如何なることであらうか。即ちその一

つはヂイデロが、コメデイー・フランス座の舞臺にさへも加へようとしたところの劇の改革であつて、次には、彼が後年『自然の解釋』のなかで、もつと嚴格な形態を與へた哲學的思想であり、最後には、當代の風俗習慣に對して與へた批判である。

併し乍ら讀者は全部を通讀したならば、ヂイデロが、宮廷人、婦人や若人たちに、彼等が考へつきさうもない考へを抱かせると云ふ手法を用ひたことを許してやらねばならないと思ふであらう。

『不謹愼な寶石』は、若くして早くも來つた處の老成と戰はうとする、一人の青年の物語である。ヂイデロは此の時三十五歳であつたが、既に老境に一歩を入れてゐたので、自分が半生に於て充分に注意して蒔いてをいた作

物を纏めようと考へた時に、彼はしみ〴〵と此の年の距たりを感ぜざるを得なかつたのである『追憶集』に載せられた、彼がネーヂュオンに語つた言葉には、次のやうな一節がある。

『わるい書物が民衆の風習を墮落させるのでは無くして、民衆の俗惡な風俗習慣こそ、却つて惡い書物をつくるのである』そして又ネーヂュオンは次の様に語つてゐる。

『ヂイデロが此書物について聞いた噂は、せいぜいよくつて、痛ましいことだとか、困つたものだと云つた様な話しばかりであつたと云つてゐる。これは彼が、人の非難する一つの過ちを自覺してゐるのに因るものである』が、之について彼は、――若しも自分の指一本を失ふこ

とはしまふ――と、いつも私に語つて居た』

決して躊躇することなく指の一本位よろこんで棄てて

によつて、この過ちを償ふことが出來るならば、自分

我々はヂイデロのかうしたまごころから懺悔を疑ふわけではないが、彼は此の誓ひを破つてしまつて、『不謹愼なんぱ、指一本を差し出して『寶石』を讀み直し、又よしなもの、その指は小指で、而も左手の小指（いちばん惜しくないし）を切つて貰ひたいと思ふのではないかとも思ふのである。又大事な章については寛大である樣にと我々には要求するのではないかとも思はれる。そしてその擧句が、自分の犯した過ちが、いつも眼の前にぶらさがつてゐることが、一度公衆の眼に這入つたものを禁止されることよりも、より實際的に効めのある罰であると考へてゐた

のではあるまいか。そして彼は散々理窟を並べた末に、ネーヂュオンの言つたやうに、『不謹慎な寶石』を自分の作品の中から取り去つてしまつても、その代りに未だ公けにされてゐない三つの章を入れて、結局何とかして、『不謹慎な寶石』を自分の作品の中に入れて了ひたいのではあるまいか。そのことは彼が次に述べるやうな言葉のうちにも充分うかがはれる。

『私は將來に於て必ず肯いて貰ふことの出來るやうな一つの斷定を敢てしようと思ふ。それは外でもない。單に猥褻であると云ふに過ぎない書物が、その名聲を失つてゆくに從つて、僞りの雄辯だとか、迷信だとか云ふものに關聯して、却つてその名前を謳はれるであらうと云ふことである。それと云ふのは、人間と云ふものは、さう

した物事の中に俗惡な風俗習慣に對する諷刺を見つけ出すからである。』

ローゼンクランツ氏は『ヂイデロの生涯と其の作品』と題する著作の中で、彼の作品の中でもとりわけて『マンゴグルの夢』（第三十三章）が素晴らしい傑作であるとして推奬してゐる。

ドポールミイ氏の『圖書目錄』には、『不謹愼な寶石』は『物語りの騎士』と云ふ古い寓話詩から取材を得たもので、かなり長く引き伸ばしてあり、非常に猥褻な面白い小說である。之はヂイデロの作品と云はれてゐるが、第一版が出版されたのは一七四八年で現在存するものはその第二版である。この第二版ものは既に英語にも飜譯されてゐる——と書いてある。

最初の頃の版を捜し出すことは、可なり困難な事で、數ヶ月かかつて、和蘭で十部ほどやつと手に入れることが出來た位である。第一版は四六版もので三卷から成り立つてゐるが、我々がドボールミイ氏の『圖書目錄によつて第二版ものだと信じてゐるものは、二卷しか無い。そして體裁は大變面白いものだが、署名は無く、表題には吡喩の意を籠めた――『空想』は『無分別』の手から筆をとり、『愛』はそれに口授をする――と云ふ文句が書きつけられてゐる。それは、『無分別』が肩掛を纏ひ、左手に女の顏型が先端についてゐる杖をついて立ち、右手で、半裸體になつて流れの岸の木蔭の處に座つてゐる『空想』に筆を渡してをり、『愛』がその足の下に蹲(うづく)まつて、一枚の紙を膝の上に載せてゐる繪である。

れが時には優しい戀人達を仲違(なかたがひ)させたり、誰よりも實(じつ)のある戀人達によく僞をつかせたりするのだと思ふ。

お氣に入りの彼女は話しをするのに、必要で又珍らしい才能を、此の上もなく持つてゐた。それで、彼女は、バンザの醜惡な物語りをすつかり皇帝に話したが、彼女は餘りたしなみのある女ではなかつたので、いつでも皇帝の愛撫を受けてゐたと云ふ譯ではなかつた。からして遂にマンゴグルとミルゾザとはお互ひに話すこともする事もすつかりなくなり、お互ひの愛には變りはないが、それでゐて、少しも心の樂しまないと云ふ日が偶(たま)にはあつた、之から話さうとするのも丁度そう云ふ時の事である。

皇帝は安樂椅子にだらしなく倚りかかつて、言葉もなく結玉(むすびたま)を作つてゐる彼女と、向ひ合つてゐた。それは時間の都合で散歩が出來なかつた爲めであるが、彼はカルタをし樣と云ふのでもなく、十五分間許りかうして陰氣くさい時間が經つた時に、皇帝は、續け樣に欠呻(あくび)をしながらから言つた。

『何と云つたつてジェリオットの歌はまるで天使の樣だつたなあ』

『それで陛下は又退屈し切つてゐらつしいますのね』
と彼女はつけ加へて云つた。
『いや〳〵お前の顔を見てゐれば決して退屈しやしないよ』
マンゴグルは半ば欠呻をしながら言葉を續けた。
『それならよろしうございますが、でゝ陛下はぼんやり考へていらしつたり、上の空でゐらしつたり、欠呻をなさいますのは、一體どう遊ばしたので御座います？』
とミルゾザは尋ねた。
『俺は知らんよ』
と皇帝は答へた。
『妾には略々想像がつきますわ。妾が陛下のお氣に召したのは、妾の十八の年で、それから四年間陛下は妾を愛して下さいました、けれども十八に四つ足せば二十二になりますわ、妾もすつかりお婆さんになつて了ひましたのね』
と彼女は言葉を續けた。

マンゴグルはかうした勘定を笑つた。が、ミルゾザは更につけ加へて言つた。

『けれ共假令妾がもう陛下の御寵愛を蒙る値打がなくなつたと致しましても。相談の御相手としてはもつて來いだと云ふ事だけは。是非とも御判りになつて頂きたいと存じますわ。いろいろなお慰みも、決して陛下の御不興を防げは致しませんもの。陛下は御不快なのです。それが陛下の御病氣で御座いますわ』

『俺はお前の考へには同意はせんが、若し病氣だとしたなら、何かいい藥でもあるのかい？』

とマンゴグルは言つた。

ミルゾザは一寸の間考へた末、陛下はお話に非常な樂しみを感じてゐらつしやると思つて、町の粹な事件のお話しをして了つたため、今ではお話する事が無くなつたし、又宮延の事件に就てはよく知つてゐないのは遺感であります、よく判り次第に、そのお話でも申し上げませうと答へた。

『それはいいだらう、しかし誰がそんな馬鹿らしい話を知つて居るだらうか。縱んばそれを知つてゐても、誰がお前の樣に巧く話せるものがあるだらうか』

とマンゴグルが言つた。それに答へてミルゾザは。

『陛下にお話し申し上げる人が誰でも、そんなことにはお構ひなしに、陛下はきつと面白いと御思ひになるでございませう』

『そんならお前と一緒に、俺の宮廷の女達の、面白い事件を考へて見ようぢやないか。縱んば知る事が出來なくなつたつて、考へるだけでも面白いぢやないか』

とマンゴグルは言つた。

『それは難しい事かも知れませんが、それより外にはないと存じますわ。陛下の親御樣であり御友達であるククファ仙人は、もつと面白い事を知つてゐますから。あれに御相談遊ばしたら如何で御座いませう』

とミルゾザは答へた。

『ああそうだつた、お前は素晴らしい事を考へついたね。俺は仙人が俺の爲めに充分力を盡して呉れると信じてゐる。俺は直さま室に籠つて、仙人を喚び寄せよう』

と皇帝は大きな聲で云つて、身を起し、コンゴーの習慣にならつて彼女の左の眼の上に接吻を

してから、室を出て行つた。

第四章

―仙人を喚び寄せる事―

ククファ仙人は年老つた憂鬱症患者であるが、世間のごたごたした事や他の仙人達との交際が、彼の濟度の碍げになりはしないかと惧れて、空間に逃避して偉大なパゴードの限りない三昧に、恣に沒頭したり、ひとりで撮み合つたり、誹り合つたり、愚弄し合つたり、退屈を感じたり、怒つたり、死にさうな程飢えたりしてゐた。彼は筵の上に横になつて、身體は袋の中に縫ひつけられて、横腹の處を綱でしつかりと縛つて、兩腕を胸の上で組み合はせ、頭を頭巾で包んで、鬚の端の方丈を出してゐた。彼は眠つてゐたが、人の目には瞑想に耽つてゐる樣に見えた。彼の友達としては彼の足許に眠つてゐる梟と、筵の上を馳け廻る鼠と彼の頭の上を飛ん

で行く蝙蝠許りであつた。彼を喚び出す時には鐘を鳴らしながら、バラモンの夜のお勤めの最初の一節を誦ずるのでし、さうすると彼は頭巾を高く上げ、眼を擦つて、草履をはいて出掛けて行くのである。そして二羽の木兎の足を掴みながら、それを空中に飛ばせて連れてゐるカマラドリの修道士みたいな風をして、皇帝の御前に出るのであつた。

『ブラーマの祝福が陛下にありまする様に』

身をひれ伏し乍ら彼は云つた。

『アーメン』

と皇帝は答へた。

『何の御用で御座いますか』

『いと易い事ぢやが、どうか俺に俺の宮廷の女達の事に就いて何か面白い事を聞かせてはぬれまいか』

とマンゴグルは答へた。

『おお陛下よ、陛下はどんなバラモンの僧よりももつと御自身の事に慾を持つていらつしや

います。一體ああした馬鹿な人達をどうなさらうといふ御考へなので御座いますの？』

とククフアは言葉を挾んだ。

『俺は唯彼女達が係りあつた事件を知りたいのぢや』

『けれどもそれは出來ない事で御座います、女達に自分の事件を白狀させる事は決して出來ない相談で御座います』

『そうでもあらうがそこの處を遣つて見て呉れいと申すのぢや』

と皇帝はつけ加へて云つた。

仙人はこの言葉に耳を搔き、指で長い鬚をしごいてから、じつと瞑想に耽つてゐたが、間もなく我にかへつてマンゴグルに言つた。

『陛下よ、必ず陛下の御滿足の行く樣に致しますで御座いませう』

そう云ふと同時に、彼は、上着の左側の腋下の處についてゐる深いポケットの中に右手を突つ込んで、初に供へた穀物と、小さな鉛の像と、黴の生えたボンボンと、マンゴグルが始めにはサンフブールの指環だと思つた一つの金の指環を引つ張り出した。そしてから云つた。

『陛下は此の指環をよく御存じでゐらせられませう、之は指におはめ下さい。若し陛下が指環についてゐる寶石をお廻しになれば、女達は誰でも皆自分の色非を大きな聲でよく聞えるやうにはつきりと申しませう。けれ共彼女達が喋るのを決して口で言つてゐるのだと御考へになつてはいけませんよ』

『そんなら一體女達は何で喋るのか』

とマンゴグルは聞いた。

『それは女達の中にある一番眞面目なところで話すので御座います、そして陛下が知りたいとお思ひになる以上に物事がよく判りますのも皆女達の寶石のお蔭なので御座います』

とククファは答へた。

『寶石で話す？　一體話しをする寶石なんて、俺は今迄、そんな不思議な事を聞いた事は無いぞ』

と皇帝は洪笑しながら云つた。

『陛下よ、私は陛下の祖父君のためにも同じ様な不思議な事を致した覺えが御座います。ま

あ私の言葉を御信用下さいませ。さらばお暇をいただきませう。どうかプラーマの祝福が陛下にあります様に。どうぞ陛下の祕話をお使ひ下さいませ、さうしてそれが餘りよくない嗜好だと云ふ事を御考へ下さいませ』

から云つて仙人は、頭を下げて頭巾を被り直し、木兎(みゝづく)の足を捕(つかま)へて空中に消えて行つた。

第五章

―マンゴグルの危い試みの事―

マンゴグルはククフアの怪しい指環を手に入れると直ぐに、お氣に入りの彼女に先づ最初の試(ため)しをして見たくなつた。言ひ忘れたが、指環の寶石を廻すと、女の寶石に話しをさせる德を持つてゐる外に、それは又小指にそれをさしてゐる人の姿を見えなくするのである。これによつてマンゴグルは一瞬間のうちに方々に飛んで行くことが出來。普通誰にも見られないで行は

れる物事を充分に見る事が出來るのである。それで彼が指環に手をかけて『あそこに行きたい』と言つた丈で彼はミルゾザの處に來てしまつたのであつた。

ミルゾザは皇帝が來たとも知らずに、寢床に横になつてゐた、マンゴグルはそつと枕許に近よつて、ほの暗い蠟燭の光りで彼女の顏を見た。

『よし〳〵この女が眠つてゐる間に指環を取り代へ、此の女に向けて指環の寶石を廻して、女の寶石を呼び醒して見よう。だが併し俺の手を止めるものがあるが一體何がさうするのだらう？　俺に實をつくすミルゾザの心を疑ふなんて俺にはそれは出來ない、俺はお前の話を聽かうなどと思つてはいけないんだ』

彼はかう云つて指環に指をかけたが、彼の指が指環から離れるか離れないうちに彼はすつかり夢中になつて了つて、心の中で叫んだ。

『一體どうし樣と云ふんだ？　俺はククファの忠告に叛いて了つた。俺は一時の好奇心を滿足させたいために。俺の愛人と生命をさへも失はうとしかけてゐる！　若したとへ指環が世にも不思議な事を告げてたならば、二度とこの女には會へなくなり、俺は悲しみの餘り死んで了

ふだらう』

マンゴグルは昂奮の極に慎みも忘れて了つて、終りの言葉を少し高聲に言つて了つたので彼女は眼を醒した。

『おや、妾びつくり致しましたわ、お出になりますならどうしてお知らせ下さいませんでしたの？　そして私の目の醒めるのを待つておく出でになりましたの？』

と彼女は言つた。

マンゴグルは彼女にククファと會つた結末を話して、仙人から貰つた指環やその他のものを見せた。

『まあ何んと云ふ恐ろしい祕法をお受けなさいましたのでせう！　けれ共どうしてもお使ひなさらうといふお積りなんで御座いますの？』

とミルゾザは言つた。

『何だと？　此の不屈き者めが！　俺がそれを使はうとしたなら如何すると云ふのか？　お前が理屈をこねるならお前から先きに遣つて了ふぞ』

と彼は言つた。

かうした恐ろしい言葉をきくと、彼女は眞蒼になつて、戰き、ブラーマやその外の印度やコンゴーの神々の名を唱へて、自分に對して秘法を用ひては呉れるなと皇帝に懇願し、言葉を續けて言つた。

『妾がいつでも愼みぶかう御座いましたら、妾の寶石は決して何とも申しますまいに！　あ、でも陛下は妾に到底お赦しする事の出來ない傷手をお負はせになるので御座います。若し寶石が話しをしましたなら妾は陛下の御信用と御心を失つて了ひますし、陛下も亦失望してお了ひになりませう！　陛下だつて今迄私達の仲を續けてゐらしつて、どうしてそれを破らうと遊ばしますの。どうぞ私の申し上げる事を信じて下さいませ、仙人は決して惡い事は申し上げませんから彼の忠告をお聞き遊ばして下さいませ』

『俺もお前が眼を醒す迄、心の中でそう言つてゐたのだよ、しかしお前が、若し、もう二分間眠りを續けてゐやうものなら、それこそどんなことになつて了つたか判りやしなかつたんだよ』

とマンゴグルは答へた。
『どんなことになりますつて、そりや妾の寶石は何にも申し上げませんが、それでも陛下は永久に妾をお失ひ遊ばす樣なことになつたで御座いませう』
『そんな事になつたかも知れないね、けれ共俺は今は危い處も過ぎて了つたんだからお前からは話しを聽かないと誓はう』
とマンゴグルは言つた。
それでミルゾザは氣を取り直して、皇帝が質問し樣としてゐた女の寶石についてじようだんを言つたりした。
『シダリズの寶石は何か申しますわ。ハリアのも世の常でない話で御座いませう、そして陛下はきつと妾の祖母の話をお聽き遊ばしますでせう、又グローセの話はきつとお聽きになる丈のねうちがあると存じますわ。あの方はコケツテイシユで綺麗な方で御座いますから』
『そうだ。あれの寶石が默つてゐるならばそれはきつとさうした理由からなのだ』
と皇帝は答へた。

『それからフエディムの寶石にもお聽き遊ばしませ、あの方はおしやれでも醜い方で御座いますわ』

と彼女は言葉を挿んだ。

『そうだ、醜いからつておしやれをしてゐる譯を聞ひ質さうとするのは、お前の様に質が悪くならなけりや出來ないね。俺はフエディムは聰明だと思ふよ』

と彼は語を續けた。

『陛下はあの方をお好きなので、それで聰明な人だと思つてゐらつしやいますかも知れませんが、あの方の灰色の眼は偽りを申して居りますわ』

と彼女は答へた。

『あれの眼は偽はりを言ふつて、お前がフエディムの事を言ふと氣が焦らくして來るよ。俺にはこの寶石で質問が出來るんだと云つてゐるぢやないか』

と皇帝は荒つぽく答へた。

『けれ共陛下はあの方にどれを言へと仰言る事がお出來になりますの？』

とミルゾザは言葉をつけ加へて言つた。

『俺達は直ぐにマニモンバング（コンゴーでは後宮をかう呼ぶのである）の處に行つて見よう。それは決して無駄ではないよ。それから俺の宮廷の寶石に飽きたなら、バンザ中を一廻りして見様。金持の女の寶石には公爵夫人のなんかよりももつと面白いものが見つかるかも知れないね』

『私は主だつた方達を存じて居りますわ。けれ共あの方達は大變用心深い方で御座いますわ』

とミルゾザは言つた。

『やがてはある女達の評判も耳に這入るだらう。だが俺は此の女達の寶石が、初めの言葉を言つた時に、彼女達が當惑して鬱ぐのを想像すると笑はずには居られないよ。俺はお前を後宮で待つてゐる、そして俺はお前が居なければ指環を使はない。それはよく憶えてゐて貰ひたいね』

『陛下、いくら何でも妾は、陛下のお言葉をお信じ申し上げてゐないなんてことは御座いませんのよ』

とミルゾザは言つた。

マンゴグルは、彼女のからうした念を押した言葉に微笑し乍ら、約束を繰り返し、幾度も愛撫を與へた後で室を出て行つた。

第六章

―第一の指環の試しの事―

最初にマンゴグルは後宮へ行つた。其處の女達は皆カワニヨール（數合はせの遊戯の一種）に夢中になつてゐたが、彼は其の女達の一人に指環を試めして見樣と思つて女達を眺め、さて誰れにしたものか、と決めるのに困つてゐた。かうして彼が誰にし樣かと迷つてゐた時に、彼は窓の處にマニモンバングの御殿の一人の若い女を見つけ出した。その女は夫とふざけてゐたが。それが皇帝の眼には、結婚して八日以上も經つてゐるのに、と不思議に映つた。彼等はオ

ペラで同じ棧敷に座り、公園やブーローニュの森でも、同じ馬車に乘り合はせたので、旅行が終つた時には、彼等はもう戀仲になり、考へも一致して了つたものたちであつた。マンゴグルが心の中で、

『若し此の寶石が彼女の愛人と同じ樣に馬鹿げたものならば、俺はきつと面白い獨白(せりふ)を聽く事が出來るぞ』

と考へた。すると恰度その時にお氣に入りの彼女がやつて來た。

『しつ、靜に、お前の來るのを待つてゐながら、狙(ねら)ひをつけたよ』

と彼は彼女の耳にさやいた。

『誰れにで御座いますの？』

とミルゾザは尋ねた。

『あの窓の處でふざけてゐる、あの者達にさ』

とマンゴグルは横眼で見ながら答へた。

『まあ、幸先がよう御座いますわ』

と彼女も言つた。

此の女はアルシーヌと云ふのであるが、彼女は快活で、綺麗で、宮廷のどの女達よりも一番愛らしく、又おしやれであつた。一人の酋長が彼女に逆上(のぼせ)てゐたが、彼はアルシーヌの事を書いた新聞記事を讀んで驚いて、當時の習慣に從つて、どうしたらばよいかと自分の愛人に相談した。アルシーヌは彼に對してそれは馬鹿な人達の中傷で、若し自分達が本統の道を踏んだならば、きつと默つて了ふに相違ないと答へた。それで、此の返答によつて彼女に戀してゐる酋長は、漸く氣を押し鎭める事が出來、決心をして、いろ〳〵の特權を持つて、アルシーヌと結婚したのであつた。

皇帝は今、此の女に向けて指環を廻した、すると今し方まで夫の變挺な話しをきいて大笑ひしてゐたアルシーヌは、不意に笑ふのを止めて了つた、そして間もなく彼女のスカートの下から低い聲が聞えて來た。

『ほんとに妾嬉しくて仕樣がないわ、若し妾の最初の話を聞いて下さつたならば、妾の方が酋長よりも好いとお思ひになるでせうけれども矢張り酋長つて大したものですわ』

かうした言葉をきいて、女達は、皆カルタを止めて了つて、高いざわめきを立てながら、一體その聲が何處から出たのかと捜してゐた。その時マンゴグルが

『しつ、默つて氣をつけてゐて御覽』

と云つたので、皆が默つて聞いてゐると、寶石は言葉を續けて語る。

『夫と云ふものは大切なお客さんでありますが、その人に對する接待(もてなし)によつてどう云ふ人だか見分けがつくもので御座います。何(どう)云ふ仕度をし、又何云ふ苦い水を妾は飲まされた事で御座いませう！　妾は姿を消して了ひませう、さうすれば酋長は他の處に移り住むか、或は私をジョンキルの島へ船で送つて了ふより外はないでせう』

その時に女達は皆眞蒼になり、口もきかずに顏を見合せて嚴肅な樣子になつて了つた。するとアルシーヌの寶石は言葉を繼いで云つた。

『けれ共酋長はそんな事をする必要はないと妾は思ひますわ。しかし妾は妾の愛人が用心深いと云ふ事をよく知つてゐますの、あの方は何でも物事を惡い風におとりになります。そして妾は殿方からは家來位の取扱ひしか受けませんわ』

寶石は尙ほも奇怪な物語りを喋り續けてゐた。しかし皇帝は、此の奇妙な場面が貞潔なマニモンバングを許して了つたのに氣づいて、指環の寶石をひねつて話しを止めさせて了つた。酋長は彼女の妻の寶石の最初の言葉をきくと姿を消してゐた。アルシーヌは動ずる色もなく、しばらく假睡の風をしてゐたが、女達は、彼女は逆上てゐるのだとひそ〳〵話し合つてゐた。

『ああ彼女は逆上てゐるのさ、シコーニュの云ふヒステリーつて奴さ、それにはエリキール水が何よりだ、それが何より効めがあるのだ、どれ、私が奥様連の處へ、それを取りに行つて上げ様かな』

と一人の氣取り屋が云つたので、人々はその嘲弄の言葉をきいてワツト笑ひ出した、すると此の男は又口をきいた……

『いや本統ですよ、私は物質の消耗を補ふために、それを使つてゐるんですからね』

すると一人の若い女が口を入れた。

『物質の消耗つて、一體何のことですの？　公爵さん』

『奥さん、それは偶然やつて來る一つの些小な出來事ですよ、誰れだつてそんな事位知つて

るぢやありませんか」
と公爵は答へた。
その間にアルシーヌは假睡の眞似を止めて自分の寶石が何事も喋らなかつたか、乃至は喋つても一番綺麗な事許りだつたかの樣に、大膽な風で、カルタをし始めた。一ぺんも失敗せずにやつてゐたのは彼女唯一人だつたのでその一勝負は彼女に莫大を金額を儲けさして呉れた。他の女達は自分達は何をしてゐるか知らず、手も判らず、又數も忘れ、儲(もうけ)も構はなかつたり、その外いろいろのへまをやつたので、アルシーヌが勝つて了つたのである。さうしてカルタが終ると女達は室から出て行つた。
此の事件は宮廷やコンゴー國全體の大きな評判になつて了つて、幾つかの諷詩も作られ、アルシーヌの寶石の告白は宮廷のおつちよこちよい共の手で燒直されたり、つけ足されたり、註釋をつけられたりして、公けにされた。酋長も歌に讀まれるし、彼の妻は一躍有名になつて了つた。そして見世物には仕組まれるし、散歩場でも流行兒(はやりつこ)になつて了ひ、人々は彼女の周りに群れ集つて、

『ああ此の人だ、此の人の寶石は二時間餘も續け様に喋つたんだとさ』

とロロに言つてゐた。

アルシーヌはすつかり落ち附き拂つて、此の新らしい評判を迎へ、他の女達には無い様な心の辯けさでかうした惡口を聽き流してゐた。そして彼女は、今度は、その女達の寶石が秘密を洩らすのを今か今かと待ちまうけてゐたが、とうとう彼女達は次の章に出て來る事件で困らされて了ふことになつた。

マンゴグルは人々がちりぢりばら〳〵になつて了ふと、ミルゾザの手を取つて、彼女の室に連れて行つた。彼女はカルタでかなり敗北したのと、恐ろしい指環の事を考へてゐたので、いつもの快活な様子を失つてゐた。そして彼女は皇帝の好奇心の強いのを知つてゐたし、又餘り專政的で愛の事なんか忘れて了ふ男の約束に信用を置いてゐないので、しきりと不安に驅られてゐた。

『どうしたんだい？　おい、何か考へ込んでゐるね』

とマンゴグルは云つた。

『妾とても運が悪くてカルタに敗けて了ひましたの、とりかへせる望みなんかありませんわ。三度もとられて了ふなんて信じられませんわ』

とミルゾザは彼に答へた。

『そりや可愛相に、だが俺の秘話はどう考へるな』

とマンゴグルは答へた。

『陛下、妾はひどいと存じますわ、陛下はきつとお樂しみか知れませんが、いつか悲しい結果を見ますでせう。陛下は家と云ふ家に騒動を惹き起したり、夫達の身を誤らせたり、愛人達を絶望の淵に陷れたり、女達を破滅させたり、娘達の名譽を汚したり、その外にいろいろの大騒ぎをおこしなさらうとしてゐらつしやいます。陛下どうぞ後生で御座いますから……』

と彼女は云つた。

『おや、お前はまるでニコールみたいに俺を訓誡するんだね。一體お前は他人とどんな利害關係があるんだね。いやいや俺は決して指環を手放さんぞ。縱んば夫達が身を誤つたり愛人達が絶望の淵に沈んだり、女達が破滅したり、娘達の名譽が汚されたりしたつて、それが俺と何

の係りがあるんだ？　俺は自分が樂しければそれでいゝんだ。俺は皇帝ぢやないか。明日はきつと今日よりももつと面白い場面が見られるよ』

とマンゴグルは云つた。

『妾さう云ふ事を信じたくは御座いません』

とミルゾザは答へた。

『いや俺は、きつと。お前が話しをきかずには居られない程面白い寶石にぶつかると思ふよ。そして俺がお前に代理になつて行く樣に言ひつけた時に。お前は何處へでも行くだらうね。若し話しがつまらなければ、助けに行つて上げ樣が、兎もあれ、お前は彼等の事件の話しを彼等の口からか、俺の口からか、どの途聽かなきやならないのだ。遣りかけた仕事でもうどうする事も出來ないのだ。どうかお前も新らしい話し手に仲よしになる樣に心がけておくんだね』

から云つて彼は彼女を抱擁して、彼が今行つた許りの試めしの事を考へたり、ククファ仙人に心から感謝をしたりしたり乍ら自分の室に歸つて行つた。

第七章

―第三の指環の試しの事―

その翌日ミルゾザの處でさゝやかな晩餐が催され、招ばれた人々は早くから彼女の室に集つて來た。前の晩にあの不思議な事件が起つた時に、人々は面白半分出かけて行つたが、今夜は禮儀の上でやつて來た。女達は皆鹿爪らしい風をして簡單な言葉ばかりしか話さなかつたが、誰も皆何かを待ち受け、始終誰かの寶石が一座の會談の中に混つて聞えはしないかと待ちまうけてゐた。彼女達はアルシーヌの災難を話題にし樣と考へてゐた。しかし誰一人としてその事で口を切らうとする者はなかつた。アルシーヌは、晩餐に出席することになつてゐたけれ共、出席しなかつたので、人々は彼女が頭痛して休んでゐるのだと考へた。だが一日中その事を喋り通してゐて、餘り恐ろしさを感じなくなつてゐたのか、或は勇氣のあるふりをしてゐる

のか、それ迄沈んでゐた會話は追々と活氣づいて來た。女達は本統の事を知つてゐるか否か判らないくせに、旺んに肩を持ち、本當らしく話しをしてゐた。ミルゾザは宮臣のゼグリに向つてその話しが面白くないかどうかと聞いてゐた。

『奥様はシャズール將軍がシベリヌと云ふ若い娘と近々に結婚することを御存じでゐらつしやいますでせう、處がその話は破談になつたので御座います』とゼグリは答へた。

『一體どうした譯なんですの？』

とミルゾザは口を入れたが、ゼグリは言葉を續けて云つた。

『それはシャゼールが女の化粧室で聞いたと云つてゐる一つの不思議な聲の爲めなので御座います。昨日から皇宮の中庭にはその聲を聞きたいと云ふ人達が大勢集つて居ります』

『しかしそれは馬鹿げた事ですわ。アルシーヌの不幸だつて、決して確かだと云ふ譯でもありませんわ、まだ深く調べてはゐないんですからね』

と彼女は云つた。

『奥様、私は彼女が話すのをはつきりと聞きました、あの方は、口を開けないで喋りました

が、可成りはつきりした發音で御座いました、それでその世にも不思議な音聲が何處から出たのかといふ事も話して想像に難い事では無いと存じます。私は今こそ白狀しますが、その聲をきいて氣を失ひさうになりました』

とゼルアイドが横から口を出して云つた。

『氣を失ひかけたつて、しかし他の事件の時にはそんな事はなかつたぢやないか』

とゼグリが答へた。

『寶石が秘密をもらすと云ふ事よりももつと恐ろしい事があるとでもいふのかい？　おしやれをするのを止すか、おしやれで通らうと心を決めるかどつちかにしなければならないね』とゼルマイドが怒鳴るとミルゾザも

『全く、どつちか一方にするのは辛い事ですわ』と云つた。

『いや奥樣、女の人達はもう諦めなきやなりませんわ、寶石には喋りたい丈喋らせておゝきなさいませ、そして人の云ふ事なんか氣にかけないでうつちやつておゝきなさいませ。女とかその愛人とかの寶石が秘密を洩らしたからつて、濟んで了つた事がどうなるのです？』と他の

女が答へると又他の女はかう云つた。

『女の事件をどうしても世間に洩して了はなきやならないと云ふんでしたら、その人の愛人の口から云ふよりも寶石に云はせる方がいゝと思ひますわ』

するとミルゾザは云つた。

『そのお考へは風變りですわね』

『本當ですわ、愛人と云ふものは普通は秘密を洩らさうとする前には、不滿を感じます、そうしてそれから物事を荒立てるものですが、その點では寶石が喋るのと事實に少しも變りはありませんわ』

と其の女は答へた。

『私はそうは思ひませんし、私は證人の勢力の方が犯人の供述よりも大事だと思ひます。愛人が、若し自分が犧牲を捧げた神を自分の話で汚さうとするならば、その人は何等信用するに値しない不信心者なのです。けれ共若し神が聲を出したのなら、何と云つて答へたらしいのですか』

とゼルマイドは云つた。

『若し神が自分の云つた事を知らないとしますならば……』

と二番目の女は云つた。それ迄默つてゐたモニマは沈默を破つて、だらゞした調子で無頓着に口を切つた。

『あゝ妾の神が喋らうと、默つてゐ樣と、その話しなんか少しも恐くはありませんわ』

丁度その時マンゴグルが室に這入つて來たので、彼は此の最後の言葉を聞き逃さなかつた。それで彼は彼女に向けて指環を廻はすと、彼女の寶石の喋るのが聞えて來た。

『何んにも信じないなんて、僞を吐いてゐるんだ』

彼女の隣りに座つてゐた人々は互ひに顏を見合はせて、一體誰の寶石が返事をしたのかいぶかつてゐた。

『私のではありません』とゼルマイドが云ふと他の女も

『私のでも御座いません』と云ひモニアも

『私のでも御座いません』と云ひ、皇帝も

『陛下よ、私は寶石が順々に話した事を存じませんが、今日迄の處では、寶石は自分にとつて非常に親しい事件の事許りを喋つたのだと思ひます、それで私は若しも寶石が自分の聞いた事許りしか話さないと言ふ程愼み深いものであるならば、寶石の言ふ事を神様のお告げのやうに信用いたしませう』

『それは神様のお告げよりももつと確かですよ』

とミルゾザが言ふと、マンゴグルはそれを引き取つて次のやうに言つた。

『本當の事を隱して見た處でそれが寶石にとつて何の利益になるのだ？　さうさせるのは、唯名譽といふ物に對する思惑ばかりなんだ。が寶石はかうした思惑を持つてゐないから、決して違つた事なんかは言ひはしないのだ』

すると

『名譽に對する思惑でございますつて？　そして間違つた事ですつて？　若しも陛下が私達と同じ樣に厄介な立場にお立ち遊ばしたならば、陛下だつてやはり名譽といふ事をお考へになりますでせう』

とミルゾザが言つたので、女達は此の言葉に力を得て自分達の寶石を試めすのは無駄な事であると言ひ張つたし、又マンゴグルはマンゴグルで、かうした試しは大概いつでも危險を伴ふものだと頑張つてゐた。

一同はかうした無駄話に耽り乍ら、シャンパンを飲んだり、洒落を言つたりしてゐる中に、女達の寶石がだん〳〵昂奮して來たので、時こそいまと許りに、又彼の悪戯を始めた。彼はかなり彼の傍近くに、夫と向ひあつて座つてゐるすつかり陽氣な一人の若い女に向けて、例の指環を廻した。するとテーブルの下の方からかすかな低い聲が悲しそうにかう言ふのが聞えて來た。

『まあ妾すつかり疲れてへと〳〵になつて了ひましたわ』

それを聞くとフツセムが大きな聲で言つた。

『喋つてるのは私の妻の寶石だ、一體何を言つてゐるんだらう』

『まあ默つて聞いてゐるがいゝ』

と皇帝が言つたので、フツセムはそれに答へて言つた。

『俺のでも無い』と云ひ、ミルゾザや他の人達も各々否定した。皇帝はかうして誰のかが知れないのにつけこんで女達に云つた。

『そんならお前達には神があるのかい？一體どうして祭つてあるんだね？』

から云ひ乍ら彼はミルゾザを除けて他の女達皆に向けて指環を次ぎ〳〵に手早く廻した。それにつれて各々の寶石は代る〳〵次の様の返事をした。

『妾は繁々出入りしました、妾はし損ひました、妾は見捨てられました、妾は教化されました、妾は疲れました、妾は虐待されました、妾は退屈しました、等々』と皆喋つたけれ共餘りだしぬけだつたので誰れがどう云つたのか、よくは判らなかつた。彼女等の言葉は時に低く時に甲高くてマンゴルや侍臣の笑ひを誘つては、その度毎に、新なざわめきを立ててゐた、そして女達は眞面目な様子をして、それを大變興がつてゐた。と皇帝は次の様に皆に云つた。

『寶石が我々の言葉をうまく話して、會話を殆んど引き受けてくれた事は誠に好都合であつた。我々は口より外の方法で話しをする事が出來るのだ。それ程迄に寶石と調子の合つたものは寶石から聞いたり、それに返事をする様に出來てゐるのだ、が俺の解剖學者の考へは違ふぞ』

第八章

―指環の試し第三の事―

小　宴

一同は食事をし乍ら、始めからモニマの事で打ち興じてゐた、女達は皆、口を揃へてモニマの寶石がお喋りをした事を責め立てゝゐたので、若しも皇帝が、から云つて彼女を庇つてやらなかつたならば、彼女はひどい目に會つた事であつたらう。

『俺はモニマがゼルマイドよりもおしやれでないとは言はないが、彼女の寶石はゼルマイドのよりも、もつと信用が出來ると思ふよ。それ許りでなく、一人の女の口と寶石とが、言ふ事が違つてゐる時には、一體どつちを信用したらいゝのだい？』

すると一人の廷臣が返事をした。

『陸下どうぞ私にそれを聽いてゐなくてもいゝと御許し下さいませ。それにもしも寶石がつまらない事を申しましても、どうぞ御氣にかけないで下さいませ』

『たかゞ寶石の戯言(たわごと)で驚くとはさて〳〵お前は愚かな者だなあ。人間と言ふものは、話せる事の中で一番都合のいゝ事許り知つてゐて、後の事はいゝ加減のあてずつぽうをするものではないか。まあ座つて、樂しんだらいゝだらう』

そこでフツセムが腰を下ろすと、彼の妻の寶石は鵲(かささぎ)のやうに喋りはじめた。

『妾はいつでも此の大きなワアラントの背の、ひよろ長い不恰好な男を心の中に思つてゐると思ひますの？　妾はあの男が死ぬのを見ましたわ。けれども此の人が……』

からうした言葉を聞くとフツセムは狂人の様に突立ち上り、劍に手をかけて、テーブルの反對側に突き進んで行つた。そして若しも近所にゐた人達が彼を取り押へなかつたならば、彼は自分の妻の胸を突き刺して了つたことであつたらう。

『フツセム！　余りお前が騒ぐから何も聞えはせんではないか。俺はお前の妻の寶石が唯一つのありきたりの意味を持つたものではないと言ふ事を言つたではないか。もしも此の女達の

夫がお前と同じ様な不機嫌な氣持ちになつておつたなら女達はどうすればいゝのだ？　何だつてお前は、たつた一人のヴァラントの些細な可愛想な事件の爲めに、そんなに心を痛めてゐるのだ。お前の席に還れ、そして充分氣を鎭めて、二度と再び俺の氣を損ずることのないやうに氣をつけるがよいぞ』

と皇帝は彼に言つた。そしてフツセムが怒りを押し鎭めて、椅子の背に身をもたせかけて、兩眼を閉ぢて額に手を當て、うつむいてゐる間に、皇帝が手早く指環を廻すと寶石は言葉を續けて喋り出した。

『妾はヴァラントの年の若い小姓とすつかり仲善くなつて了ひましたが、何時彼が手ほどきをして呉れるか存じません。或る人が手ほどきをして呉れ、他の人が結末をつけて呉れるのを妾はエゴン坊さん（婆羅門教の）と一緒に辛抱して待つてゐますわ。あの男は不恰好なんですけれ共あの人の才能では結末をつけて而も再びやり直すことが出來ますわ、婆羅門の坊さんは何て偉い方なのでせう』

から云つて寶石が感嘆の聲を發してゐるのに、フツセムは少しも同情してやる値打のない一人

の女に對して心からの悲しみを抱いた事を恥ぢ、そして一座の人達と同じ樣に笑ひ出して了つた。晩餐が終ると各々は自分の家路へと歸つて行つた、唯フツセムのみは自分の妻を、顏を被つた娘達のゐる一軒の家へと連れて行つて、そこに彼女を押し込めて了つた。マンゴグルは彼女がかうした不幸な目に會つた事を聞いて、彼女を訪ねると、家中の者は皆彼女を慰めるのに夢中になつてゐるうちにも、彼女が追ひ出された理由を聞きたがつてゐたので彼女はこの人達に次の樣に話してやつた。

『妾がかうして此處に居ますのはほんの些細な事の爲めなのですわ。昨夜皇帝陛下の處で晩餐を頂きました時に、妾はシヤンペンやトーケル酒を澤山飲みましたの、そして妾の寶石はいろ〳〵お喋りを致しましたが、妾は何を申したか存じませんわ、妾はどう言ふ考へから寶石が喋つたのかも存じませんの、それなのに夫はそれで氣嫌を惡くして了つたのですの』

かうした彼女の言葉をきいて修道女達は答へて言つた。

『それは旦那樣の方が惡うございますわ、そんなつまらない事なんかで怒るものではありませんわね』

『おやまあ貴女の寶石が話しをしましたつて、そして今でも話しをするでせうか、まあ何とかしてきゝたいわねえ』

から言つた修道女達は、間もなく皇帝が指環を可愛想な修道女に向けて廻はしたので、自分達の望みを遂げる事が出來た。その修道女い寶石は、彼等が丁寧にして呉れる事を感謝してから、結局どれ程彼女が自分の仲間と仲よくして行つても、矢張り婆羅門の坊さんと懇にする方が尚更いゝとはつきり言ふのであつた。

皇帝はこの機會を利用して此の女達の生活の特別に變つた處を知らうと考へて、クレアンテイスと言ふ一人の若い修道女に向けて寶石を廻すと、未だ處女だと言はれてゐるこの寶石は二人の植木屋と一人の婆羅門の坊さんと、三人の御者とに關係があると言ふ事を白狀した。又ゼフイリーヌは寶石の力を借りて、此の家の使丁の爲めに母と言ふ名譽のある名前を負はされて了つたことを告白した。然し乍ら皇帝が何よりも驚いた事には、此の浮世を離れた寶石達がかなり猥はしい言葉を吐いてゐるのに、此の寶石の持主である處女達は少しも顔も赤めずにそれを聽いてゐると言ふ事であつた。それから又彼は十五か十六になる一人の新發意に向けて指環

を廻すと、次の様に返事をした。

『フロラは再參修道院の仕切格子越しに若い士官を盗み見した、彼女が此の士官を好いてゐると言ふ事は確かな事で、彼女の小指は私にその事を白狀してゐる』

之はフロラにとつて誠に都合の惡い事で、此の爲めに彼女は二ケ月間の祈禱と教誡との罰を受けなければならなかつた、そして皆も亦皆の寶石がお喋りをしない樣に祈禱する樣にと長老から言ひつけられた。

第九章

バンザの學術協會の有樣の事

マンゴグルが修道女の處から引き揚げると間もなく、婆羅門の修道院の娘等が一人殘らず寶石の爲めに喋らされたと言ふ噂がバンザ中に傳はつた。それは學者達の好奇心を唆つて彼等は

始めは不可能事として取扱つてゐた一つの事實の說明を寶石といふものゝ中に見つけ出さうとし始めた。寶石のお喋りは數多くの世にも勝れた作物を作り出し、人間の精神の最後の努力とも見る事が出來る澤山な記錄をアカデミーに與へた。

パンザの學術協會を作りそれを維持して行く爲めには絕えず、コンゴー、モノエムヂ、ベルガンズその他の隣接した諸王國の偉い學者達が呼び集められてゐて、その中には自然史、物理、數學等で勝れた學者と言ふ學者達が集つてゐた。此の蜜蜂の群は倦まず撓まず眞理の探究にいそしんでゐたので、彼等の勤勞の結晶である幾多の發見は毎年公けにされて行つた。

此の學術協會は當時渦卷派（ヴォルティユース）と引力派（アトラクションネール）との二つの派に分れてゐた。渦卷派の牛耳を執る者は高名の幾何學者で又偉大な物理學者であるオリブリで、引力派の頭目は高名の物理學者で偉大な幾何學者であるシルシノであつた。オリブリとシルシノの二人はお互ひに自然の說明をつけやうと努力してゐた。オリブリの學說と言ふものは一寸見たゞけでは頗る簡單なもので、重要な現象の全體に就ては滿足な說明を與へる事は出來ても、部分〳〵に立ち入ると誤つて居るものであり、之に反してシルシノの夫はその出發點は馬鹿げたものであるが、而も夫は彼に

とつて何よりもふさはしいものである。オリブリの體系を破産させた部分の說明は反つてシルシノの體系の基礎を固めた。シルシノの學說は謂はゞ入り難く悟り易しと言ふものであり、オリブリのは反對に入り易く悟り難しと言ふ樣なもので、彼の哲學は研究よりも智慧を必要としたものであり、シルシノの弟子とならうとするには澤山の智慧と研究とを持つてゐなければならなかつた。故に人々は何の準備も持たずしてオリブリの學說に入ることが出來、眞理探究の鍵は何人に對しても與へられてゐたが、シルシノの夫は唯勝れた幾何學者のみ開かれてあつた。オリブリの渦卷はどんな人でも把握し得たが、シルシノの中心力は唯第一流の代數學者の爲めにのみ作られてあつたのだ。だからいつでも一人の引力派の人に對して百人の渦卷派の人が對抗し、一人の引力派の學者は百人の渦卷派の學者に匹敵してゐた譯である。から云つたのが不謹愼な寶石によつて震撼させられた當時のバンザの學術協會の有樣であつた。

此の現象は餘り人の氣も引かず又論爭も引き起されなかつた。そして會合は深い沈默に包まれてゐたので、會長は意見のある人は發表して貰ひたいと催促した。それで遂に渦卷派のペルシフロと言ふ學者が立ち上つて口を切つた。

『諸君、此の事實と言ふものは世界の組織に基因するもので、私は夫が潮と同じ原因を持つものではないかと考へるものであります。諸君今日は彼岸の中日であると言ふ事を御記憶願ひ度いと思ひます、併し乍ら私は私の推測、清算をする前に此の次ぎの機會に於て寶石の言ふ處を聞かなければならないと考へるのであります』

すると引力派のレシプロニ氏が言つた。

『諸君、私は我國の港と言ふ港に於ける潮の高さに關する一つの學說の表を持つてをります。實際觀測の結果は私の計算に僅かばかりの誤差しかなかつたと言ふ事も事實であります。けれ共もし寶石のお喋りが（潮の干滿の現象）と伴ふものであるならば、その事實から抽き出す處のものを使ふ事によつて此の厄介な事の補ひをつける事が出來るでありませう』

その時三人目の人が立ち上つて、黑板の處に近づいて行つて自分の圖を描いてからから云つた。

『甲乙等々の寶石が……』處が此處の處で無智なる飜譯者達はアフリカの著作者が我々の爲めに書いてをいて呉れたのに相違ない處の一つの證明を我々から奪つて了つた。それで二

頁近くの脱丁(だつちやう)の次ぎにかういふ事が書かれてある。『レシプロニの議論は嚙んで含める様なものである。そして人々は彼の辯證法に基く議論に基いて、女達が聞いたことを寶石の力によつて喋るに違ひないのだ』と推論するに至るであらうと考へた。

その後で生物學者のオルコトム博士は次の様に言つた。

『諸君、私は一つの現象に就いて架空の假定の中にその原因を見つけ出さうとする位ならば寧ろ其の現象を抛棄して了ふ方がよいと考へるものであります。私自身としては諸君に御報告申し上ぐべき推測が立たない以上は沈默を守る心でありました。併し乍ら私が實驗し研究し考察しました結果として、私は發作の中に寶石を見出したのであります、そして書籍による智識と、經驗との力を藉りて、我々が希蠟語で「デルフエス」と呼んでゐる處のものが氣管の持つ特性といふものを全部具つてゐると言ふ事、並びに、口と同じ様に寶石によつて話しをする事の出來る人が居ると云ふ事を確かめる事が出來ました。左様。『デルフエス』は同時に絃樂器であり又管器樂でありますが、何(どち)らかと言へば絃樂器なのであります。外から入つた空氣が之に觸れると我々が聲帶と呼んでゐる張り切つた織維の翼の上に弓の役目をうまく勤めます。此の

空氣と聲帶との軟い衝突によつて聲帶は戞動(せんどう)し、此のいろ〳〵速さの違ふ震動によつて樣々な音を出すのでありまして、そして人間は此の音をいろ〳〵思ふ儘に變へて話しをするので、歌ふ事も出來るのであります。

もしも二つの聲帶しか無く、そして之等のものが同じ長さを持つたものであるとするならばそれが人間の聲が出し得る限りの低い聲や甲高い聲や強い聲や弱い聲等をうまく出す事が出來るのは何故であるかと言はれるならば、私はそれに對して、此の器官と樂器と比較致しましてかうした結果が生れるのは聲帶の伸縮に因るものであると答へるものであります。

かうした部分が伸張し收縮し得ると言ふ事は諸君の如き學者の集りである此の會合に於ては證明する必要はありません、が此の伸張と收縮との結果として『デルフエス』は高度の違つた聲を出すことが出來るので、要するにあらゆる聲の抑揚と啼聲の音調とは全く疑ふ餘地のない事實なのであります。之は私の經驗に基くものでありまして、私は『デルフエス』と寶石に諸君の面前に於て議論をしたり話しをしたり歌を歌つたりさせてもいゝのであります』

オルコトムは何とかして、寶石を自分の同僚の一人の氣管と同じ程度にまで引き上げ樣と心

を決めてから述べ立てた。

第十章

―前の例よりも學薄くして暇少き人々の話しの事―

アカデミーの會合の續き

人々はオルコトムの説明を器用なものだとは思つたが動かすことの出來ないものであるとも考へなかつたので、彼に對して次の様ないろ〳〵の質問を浴せかけた。

『若しも寶石が話しをすると言ふ特別な性質を本來から持つてゐるものならば、それを使ふのにかく迄待つてゐたと言ふのは何故なのであるか。若しもそれがプラーマの恩惠であつた彼が女達に對してあの様にも喋りたいと言ふ強い欲望を起させ、又女達に話しをする器官を二つ與へたとするならば。此の女達が此の自然の貴い贈物をか程迄長い間無視してゐなか

つたのは變である。何故同じ寶石はたつた一回だけしか喋らないのであるか。寶石がどれも皆同じ問題について許り話すのは如何なる譯なのであるか。他の者が喋つてゐるのに、或る者がむつゝり押し默つてゐるのはどういふ仕掛けによるのであるか。加之寶石のお喋りを彼女等が喋つた時の狀態とか、喋つた事とかに依つて判斷すると、それが自分自身の意思からでないと信ずべき節が充分ある。且又もしも寶石をそれに沈默を守らせておく樣な力の中に置いてをくならば、それはきつと默つてゐたであらうと言ふ事も疑ふ餘地はないのである。』

オルコトムはかうした反駁に滿足を與へなければならないと考へて、次の樣の答へをした。

『寶石はいつでも話してゐるのではあるが、その聲が餘り低い爲めに或る時には寶石の持ち主さへも殆んど聞きとれない位であると言ふ事、今日になつてその音が高くなつたとしても決して驚くには當らない事、少しも破廉恥とも不謹愼な事とも思はれずに、自分に取つて最も親しい物事を話すと言ふ言論の自由を人々が壓迫すると言ふ事、假令彼等がたつた一度しか高い聲で話しをしなかつたからと言つてその時限りのものと決めて了ふ事は出來ない事、聲が無いといふ事と沈默を守つてゐるといふ事との間には相違があるといふ事。若しも彼等が同じ問題

に就いてしか喋らないとするならば、外見上は夫が皆一つであると言ふ事。まだ喋らないものは之から喋るであらうと言ふ事。若しも彼等が沈默を守つてゐるとすれば、夫は何も言ふ事が無いのか、寶石の格好が惡いのか、乃至は思想だとか、用語を持ち合はしてゐないのに因るのだと言ふ事』

更に彼は言葉を續けて言つた。

『要之ブラーマの恩惠が女達に喋りたいといふ强い欲望を滿足させる手段を與へ、喋る器官を多くしたのだと言ひはる事、は縱んば此の恩惠が後では厄介な事を惹き起さうとも夫を豫め知つた事が彼の聰明によるものであると言ふことを認める事である。そして他の人が喋つてゐるのに、或る者に沈默を守らせておくのも彼の仕業である。我々にとつては女達が時々刻々に考へを變へてゆく事は餘りに迷惑千萬な事である、又ブラーマが女達に一時に二つの反對の感情を持つ事が出來るやうにしたとするならば一體どんな事になつてゐた事であらうか』

オルコトムは多くの事について返答を與へ皆を滿足させたと信じてゐたが彼女は裏切られたのであつた。人々は彼を問ひつめて、もしも物理學者のシモナズが彼を助けてやらなかつたな

らば彼は敗北して了つたであらう。それから議論はすつかり混亂に陷つて了つて。人々は問題から離れて議論をしたり、横道に這入り込んだり、激昂したり、怒鳴つたり、罵り合つたりした後でアカデミーの會合は終りを告げた。

第十一章　指環の試し第四の事

反響

寶石のお喋りがアカデミーの問題となつてゐる一方、それは交際社會での評判となり、幾日もの話題となつて了つた。本當の事に作り事迄がつけ加へられて、傳はつて行き、此の不思議な事實はすつかり信用されて了つて半年以上も此の話しで持ち切りであつた。

皇帝は今迄と三回しか指環を試めさなかつたのだが、マニモンバンダに出入する婦人達のサ

ークルの中で會長夫人や公爵夫人の指環の話し等をぽつ〳〵話し、修道女の敬虔な祕密を物語つた後に其處に居ない女達の多勢の話しをした。卑猥な話しは少しも言葉を惜まずに話され、人々はそれに就いて考へたりした。

婦人達の一人は次の樣に話しかけた。

『ほんとの事を申しますと此の呪文は妾達を恐しい狀態に縛りつけて了ひました。自分の身體から愼みのない言葉が出やしないかといつでも恐わがつてゐなければならないなんて實際耐らない事ですわ！』

すると他の婦人が之れに答へて言つた。

『いゝえ。恐わがつてゐらつしやるのは貴女だけですわ、言つて笑はれる樣な事が寶石になければ、默つてゐたつて、話しをしたつてどつちでもいゝではございませんの』

『いゝえ、それは大事な事ですわ。妾の寶石はお喋りをしないと言つて呉れる人があれば、妾はその人に妾の持つてゐる寶石の大半を差し上げても惜しいとは思ひませんわ』

『世間の人達の分別をそんなに迄高くお買ひにならうと仰言る貴女には世間の人をうまく手

なづけなければならない様な譯がお有りなのに違ひありませんわ』

セフィーズと呼ばれる第一の婦人は之に對して直ぐに返答をして言ふには

『私は妾の持つてゐる寶石よりももつといゝものは持つてゐませんの。そして私は決して二枚舌を使つたり等しませんわ。默つてゐて貰ふ爲めに二萬エキュ（銀貨一エキュは一圓二十錢位ひに當る――譯者註）出しても決して高いとは考へませんわ。何故かと申しますと、正直の處妾は妾の口ほどに妾の寶石を信用することは出來ませんもの。妾は毎日寶石が信ずる事の出來ない樣な事件を發き、證據立て、詳しく話すのを聞いてゐます。そしてそれは持物の四分の三を皆やつて了つていくらもない殘りのにさらして體面を汚すのですが、もしも妾が遣つて了つてもさう言ふのと同じ樣に欺すならば、妾はすつかり破産して了ひますわ。妾達の名譽と言ふものが寶石にすつかり握られて了つてゐる樣に、妾達の行爲も妾達の寶石の力の下に在るのではないでせうか』

かうした言葉を聞いてイスメーンと呼ぶ第二の婦人は言つた。

『妾ならば限のない理窟なんかにくよ〳〵しないで、なる樣にさせて置きますわ、妾の婆羅

門の坊さんが申しました様に、ブラーマが寶石に話しをさせるのでしたら、妾は寶石が偽を吐いても少しも心配しませんわ、本當の事を確かめ様とすれば反つて神様に對して不敬になりますでせう。妾の寶石は話したい時に言ひたい丈話しをするかも知れませんが、それでも構ひませんわ』

その時人々は地面の下から洩れて來るかと思はれる様な山彦の様に反響して『澤山の事を』と言ふ低い聲を耳にした。イスメーヌはその聲が何處から來たのか知らなかつたので、腹を立てゝ、傍の人達に勢込んで話しかけたりして一座の慰みを押し續けて行つた。皇帝は彼女の態度に變化が來た事を悦んで、一緒に連れて來た一人の大臣の處から離れて、彼女に近づいてかう言つた。

『奥様、貴女がその昔此の婦人達の或る人に内明話をした事がなかつたかどうかと言ふ事をお氣をつけなさつたがいゝぞ。そしてその婦人達の寶石が貴女の寶石が記憶を失つてゐる物語りを想ひ出す様な悪戯をしない様に御注意をなさるがいゝぞ』

かう言ふが早いかマンゴグルは手早く指環を廻はして、此の婦人とその寶石との間に世にも

奇怪な對話が取り交はされる樣にし向けて了つた。イスメーヌはいつでも自分の些細な事件を極めてうまく處理して了つてゐたし、又秘密を打ち明ける樣な友達も持つてゐなかつたので。皇帝に向つて他人の惡口を言ふ樣な藝當は、此の際には何の役にも立たないと返答した。すると、

『多分な』と何者とも判らない聲が返事をした。

『何ですつて、多分ですつて。妾はあの人達なんか少しも恐くはありやしませんわ』とイスメーヌは此の何物とも判らない聲に胸を刺された樣に感じて言つた。

『全くだ、假令彼等が私と同じ樣に知つて居てもな』

『そしてあなたは何を知つてゐるのです』

『澤山の事をさ、さつき言つたぢやないか』

『澤山の事ですつて、そりや澤山かも知れませんがそれは何の事も意味しては居ませんわ。あなたは何か一つの事でも詳しく喋ることが出來ると思ひますの』

『出來るとも』

『そんなら一體どんな種類の事ですの、妾の心の中の事件ですの』

『いや違ふ』

『色事ですの』

『さうだ』

『そんなら一體誰とのですの。氣障な男ですの、軍人ですの、元老院の議員ですの』

『違ふ』

『役者ですの』

『さうでもない』

『それではあなたは妾の小姓か、召使ひか、支配人か、妾の夫の施行史とお思ひになるんでせう』

『いゝや違ふ』

『惡戯屋さん、そんならお終ひぢやありませんか』

『どうして〳〵』

『でももうこれ以上妾の色事の相手になる人はありませんわ。そんならそれは妾の結婚前の事ですの、それとも後ですの、さあ返事をおしなさい』

『おや〳〵奥さん、悪口を言ふのは止めて下さいよ。どうか貴女のお友達の中で一番いゝ人に悪い手段を執らせたりなんかしない様にして下さいよ』

『話して下さい、どうか皆言つて了つて下さい。妾はあなたの不謹愼な言葉が恐くはない様にあなたのする事にも大して値打があるとは考へてゐませんよ。すつかり話して下さい』

『イスメーヌ、一體あなたは私にどうさせ様と言ふのです?』

と寶石は深い歎息を洩しながら言葉をつけ加へて言つた。

『妾の德を認めて貰ひたいのですわ』

『では宜しい、德高きイスメーヌよ、あなたはもう若いオスミンや、セグリや、あなたのダンスの先生のアラジエルや、音樂の先生のアルムラ等の事を想ひ出しませんか』

『まあ、何て恐しい事なのでせう。妾のお母様はそれは嚴格な方でしたから妾をそんなに亂脈な人間になさりはしませんでしたわ、それに夫だつて、もし此處に居てくれさへしたら妾が

どんな人間だかきつと證據立てゝ吳れますわ』

『まあ左樣でせう、あなたの仲よしのアルシーヌが秘密を守つて居て吳れるお蔭でね』

『それはほんとに馬鹿らしい事です。うつちやつておいたつて構はない位無法なひどい事ですわ。一體此の婦人方の誰方の寶石が、妾の事件をこんなに迄よく知つて居るなどゝ言つて、妾の寶石でもちつとも知らない事をお話しになつたのでせう』

『奥樣、妾は妾の寶石があなたのお話しを伺つて滿足をしたと申し上げますわ』

とセフィーズは彼女に向つて返事をした。

他の女達も同じ樣な事を言つてから、勝負事をし始めた。そして誰もあの對話の話相手が誰れであつたかはつきり知らずに。

第十二章

指環の試し第五の事

マニモンバンダの中に居る女達は大抵勝負事に夢中になつてゐた。聰明なマンゴグルには女達が何故勝負事に熱中するのかその譯が判らない筈はなかつた。勝負事に對する氣持ちと言ふものは感情を偽る事の少いもの〻一つで、勝つたにせよ。負けたにせよ、目に見える徵候となつて現はれるものである。『それにしても一體どうしてこんをに迄夢中になるものかなあ。――彼は心の中で言つた――どう言ふ考へであの女達はアアラオン（トランプ遊戯の一種――譯者註）のテーブルの周りで夜を過したり、一や七（共にトランプや骰（さい）の目の――譯者註）を待ちかまへ乍ら震へたりする事が出來るのだらう。もしもあの女達がかうした熱にとりつかれて了つたならば、自分達の知らない間に彼女等の健康と美とは害はれて了ふのだ』

それから彼は非常に低い聲でミルゾザに話しかけた。

『俺は此處で一つやつて見たいと思ふのだが』

『やつて見たいと仰云いますのはどう言ふ事なのでございますの』

とミルゾザが彼に聞き返したのでマンゴグルは彼女に答へた。

『そりや俺の指環を此のカルタに熱中し切つて居る女達の中で一番我儘な女に向けて廻はして、その寶石に聞き質し、寶石の力を藉りて、自分の妻君がカルタだとか、骰だとか言ふものゝ中に自分の家の名譽とか財産を賭けるのを默つて見てゐる意氣地のないから言ふ友達に、いゝ考へを傳へてやらうと言ふのさ』それに對してミルグザは

『そのお考へは大變結構でございますわ、けれ共陛下、マニモンバンダが嘗つてアンガストリムートの無禮を祭つたとしましても、神樣によりて誓ひを立てたのだと言ふ事、又其處には之より他に人の集りが無いと言ふ事をどうぞ御考へ遊ばして下さいませ』

と言つた。

『何と言つたんだい』

と皇帝は彼女の言葉を遮つて言つた。

『妾は寶石が話しをするのを知つてゐるあの女達に對して貞潔なマニモンバンダが與へる名前を申し上げたのでございますわ』

『それは希蠟語を知つてゐてコンゴーの言葉を知らない事を自慢にしてゐるあの馬鹿な婆羅

門の坊主の考へから出た事なんだ。だが私はマニモンバンダやその教悔師から快く思はれなくつてもマニュの寶石にきゝ質して見たいと思ふ。之からのみせしめの爲めにもきつと問ひ質した方がいゝと思ふのだ』

『陛下、妾を信じて下さいますのならばどうぞ皇后樣に對してそんなお情けない事を遊ばすのは止めて下さいませ。一體どう云ふお考へであなた樣はマニュ樣の處に御出で遊ばさうとなさるのでございますの』

『とにかく俺は行かうと思ふのだ』

とマンゴグルは言つた。

『それなら何時に御出で遊ばしますの』

とミルゾザは皇帝に聞き返した。

『夜半にさ』

『夜半にはあの方はカルタをしてゐらつしやいますわ』

『そんなら二時まで待つて居やう』

『いゝえそれはいけませんわ。丁度その頃は勝負事をする者にとつては一番面白い時間でございますわ。妾は七時から八時迄の間のマニュ様が御寢み遊ばした許りの時がいゝと思ひますわ』

マンゴグルは彼女の意見に從つて、七時頃マニュの處に出かけて行つた。

マンユについてゐる女たちは彼女を寢室に連れて行つた許りの處で、皇帝は彼女の顏に浮んでゐる悲し相な樣子で、彼女が勝負に敗けたのだと思つた。彼女は室を往つたり、來たり、立停つたり、眼を空の方に上げたり、足踏みをしたり、兩手で眼を押へつけたり、皇帝には聞き取れない事を何か口の中でぶつ〳〵つぶやいたりしてゐた。そして女たちはぶる〳〵震へながら、かうした彼女の振舞ひに眼をやつてゐたが、いろ〳〵な突慳貪(つけんどん)な言葉を彼女から浴せかけられた上漸くの事で彼女を寢せつけて了つた。かうしてマニュは寢床には入つたけれ共、彼女は夜のお祈りさへもろくすつぽしなかつた。彼女が眼を閉ぢるか閉ぢない內に、早くもマンゴグルは彼女に向けて指環を廻した。すると直ぐに彼女の寶石は低い聲で喋り出した。

『今度こそは妾九十點(ヒック)で全勝よ』

マンユは寶石までが勝負事のことを喋るので皇帝は微笑した。寶石はそれから言葉を續けて云ふ。

『妾は決してアビドウルとは勝負をしまい。彼は誤魔化すことしか知らない男なのだ。ダレに就いてはもう言はないでおくれ。妾はあれと遣るときつと敗けるのだ。イスマルは仲々勝負事が巧い。妾はズルミスよりももつと氣まぐれな勝負事をする人を知らない。リカはそれ程でもないがあの男は一文無しだ。ラズリはどうだらう？　バンザの一番面白い女でも彼をすつかり遊ばせて了ふことは出來ないだらう。モリーは一體何といふつまらない男だらう。どつちみち勝負事をやる人達にはかうした心配といふものはつき物なのだ。しかし妾は一體誰と勝負をしたらいゝのか判らなくなつて了つた』

寶石はかうした嘆き悲しむ樣な言葉を話してから、自分がした不思議な業の方に話しを向け、彼女の貞操と財産とに就いての自分の骨折りに就いて喋り出した。

『若しも妾が居なかつたならば』

寶石は話す。

『マニュはもう二十邊も破産して了つてゐたゞらう。皇帝の金庫を皆持つて來たつて私が支拂つた負債を支拂ふことは出來はしないだらう。ブルラン（カルタ遊びの一種――譯者註）の一卷で彼女は一人の會計官と僧院長から一萬デュカ（十乃至十二法（フラン）の金貨――譯者註）以上も敗けて了つて、もう寶石しか殘つてゐなかつたし、而も彼女の夫がそれを買ひ戻してやつて賭けさせるにしてももう時間がなかつた。けれ共彼女はカルタを手に取つた、彼女には相手の身上が潰るせて了ふ樣なとてもやらずにはゐられないと思はれる樣な手がついた。人々は彼女に口をきく樣にすゝめたが、マニュは自分の手を見たり、何にも出て來る筈のない財布に手をかけたり、自分の手を調べて見たり、それをもう一邊見直して見たりしてゐたが矢張りどうとも決心がつかなかつた。

『奥樣どうです、お出になりますか』

と會計官は彼女にきいた。

『えゝ、參りますわ、參りますわ』

と彼女は答へた。

『幾何で』

とテユルカレはきゝ返した。

『百デユカで』

とマニユは言つた。

僧院長は寶石が餘りに高いと考へて引込んで了ひ、テユルカレは承諾した、そしてマニユは敗けて拂ひをした。

テユルカレは曰くつきの寶石を持つと言ふ馬鹿らしい虚榮心に驅られて、彼は私が彼の慰みの役を足してやると云ふ條件で以つて、私の御主人の勝負の賭物となると言ふ申出でをひき受けた。之は彼に取つてはすつかり思ふつぼにはまつた事なのであつたが、マニユがすつかり當つて了つた上に、會計官の方でも勝ち通しでゐる譯でもなかつたので、私はやはりかうして彼女の手箱の底に居る譯なのだ。

私の御主人は何よりもすばらしいフアラオンの用意をして、自分の知つてゐる人たちを皆招んだのだ。人々は唯デニカ金貨丈で賭けをしなければならなかつた。さてテユルカレの財布の

中を勘定して見るならば、この下司はすつかり夜が明けはなれた此の朝方には一錢も持つてゐずに困り切つてゐたので彼は引き退らなければならなかつた。我々は或る婆羅門の坊さんの首――その人に我々は彼が長い間懇望してゐた或る愛玩物を高い値で賣つたのであるが――に向つて行つた。その一卷きで彼は宗權からの收入の二倍を棒にふつて了つた。

しかし乍らテユルカレは幾日か經つとから復た歸つてきた、マニユが自分をよくもてなしてくれる望みはまあ無いとは彼も云つてゐたが、いつでも彼女の好意を當にしてゐた。

『まあ、貴方は妾を當にしていらつしやるなら、當が外れますわ、妾はもういゝ顏をして貴方をおもてなしすることなどは御免蒙りますわ。何時ぞや貴方が借して下さる位置にお出でになつた時に、どう云ふ譯か妾か貴方の御申出を甘んじてお受けしないかと言ふ事を、世間でも知つてゐますわ。けれ共今となつては、貴方はすつかり値打がなくなつて了つたので、貴方の仰有る事は、妾の名譽を墮すことになりますから、妾としてもどうとも致す譯には參りませんわ』

とマニユは彼に返答をしたが、彼はかうした言葉を聞くと、すつかり落膽して了ひ、私でさへ

もこの言葉にはぴつくりして了つた。彼はすつかり度を失つてしまつて、マニュが昔自分を慰めて呉れた三人のオペラの女優たちよりも、もつと自分にとつて値打がある事を彼女に聞えがしに喋つてゐた。

『あゝ、どんなに私は私のリンネルの女達（女優たちの事）と仲よしだつた事だらう、彼女は私を氣狂ひの樣に愛してゐたし、私は彼女に琥珀を買つて、彼女をすつかり嬉しがらせたものだ』

と彼は元氣のない聲で言つた。

マニュはかうした比喩が好きではなかつたので、彼が震へ上つて了つた樣な聲音で彼の話しを遮つて、直ぐさま出て行けと彼にいひつけた。テユルカレは彼女の氣持ちを知つてゐたから窓からなど飛び出さないで階段を通つて引き退つて行つた。

マニュは其後彼女が不運な目に遭つた時に、自分を慰めに來た他の婆羅門の坊主から金を借りた。つまり會計官の後に坊さんがやつて來た譯なのだ、そして我々は同じ金額を坊さんに返濟したのである。

もしもマニユが勝負事で、運がいゝ様になれば、彼女はコンゴー中の女の中で一番凡帳面な女なのだが、彼女はごく最近の勝負の時に、不意に思ひついた改良を、自分の行ひにやつて見た。つまり彼女は他人を非難することを止めたのである。彼女は美味いものを食べたり、流行服を買つたり、女たちに物をやつたり、時には衣裝を買ひ戻したり、自分のデンマーク犬や夫を愛したりしたが、彼女は月に三十度もかうした幸福な身分や金をスペートの一に張るのであつた。之が彼女の生活で、將來もかう云ふ風だらうが、之から先きどの位私が　の入　るだらうかと言ふ事を知つてゐるのは神様ばかりだ』

こゝ迄喋ると寶石は口を緘(つぐ)んで了つたので、マンゴグルは寢に行つた。そして夕方の五時頃眼をさましてからミルゾザと再會を約してをいたオペラにと出かけて行つた。

第十三章

指環の試し第六の事

バンザのありとも引き續いてあるのは唯オペラ丈であつた。有名な音樂家であるウトシウクル（リユリイを指す）とウレミフアソラシウテユテユ（ラモーを云ふ）の二人は、一方は既に老境に入らうとして居り、他はまだ生れた許りであつたが、この二人が交る〳〵抒情詩的な情景を占めてゐた。此の二人の獨創的な作者には、夫々贔負があつて、無學の徒や老人共は皆ウトミウソルの味方をし、若い者とか、音樂の達者な人とかはウレミフアソラシウテユテユの肩を持つてゐた、そして趣味の豐かな人は年老いた人も若い者も皆二人の何ちも重く見てゐた。

かうした趣味の豐富な人たちの言ふ處によれば、ウレミフアソラシウテユテユは上手なものを作つた時にはその出來は素晴らしいものだけれ共、彼は折々眠つてゐる。ウトミウソルは彼よりももつと氣品があり、決して他に比類がないと言ふ程のものではないとは云つても、平等と美とに汚されてゐるし、又彼の對手に比較すれば人の耳目を聳動する事も多く、彼の中には彼に固有な、又彼の作品の中でなければ見出す事のない特色が具つてゐた。

年を老つたウトミウソルは單純で自然で、卒直で或る時には餘りに卒直に過ぎるが、之が彼の缺點である。若いウレミファソラシウテユテユは風變りで、華々しく、複雜で、博識で或る時には餘りに博識であるが、之は彼の聽衆の短所であらう。一方は實際に奇麗ではあるが、その曲のすべてのものが、始めの處に繰り返しを持つてゐる一つの序曲しか作らず、他の者は曲も序曲も同じ位作つた。そして總ての序曲が傑作として、世に行はれてゐるのである。

自然はウトミウソルをメロディーの途の上に伴れて行き、研究と經驗とはウレミファソラシウテユテユに對してハーモニーの泉を開いて與へた。今迄に誰が彼の老匠の樣に朗誦することを知り、そして歌つた者があるか？　又誰が彼の當代人の如くに、我々に輕妙な力唄（アリエット）や淫りな歌曲やシムフオニー等を作つて呉れるであらうか。對話法を了解したのはウトミウソル丈で又ウレミファソラシウテユテユ以前に於ては、誰も逸樂を好む人々の愛情とか、熱狂的な人々の逸樂を樂しむ氣持ちとか、放埒的な人々の狂熟とか言ふものを區別してゐる、微妙なニユアンスを辯（いさ）へては居なかつた。ウレミファソラシウテニテユの肩を持つ或る人は、對話に於ては假りにウトミウソルの方が優れてゐるとしても、夫は之に就ての二人の才能に差異がある爲めだ

と言ふよりも、寧ろ彼等の引用した詩人の相違に基くものであると迄云つてゐる。彼等は言ふ『ダルダニス（ラブリユエノルのオペラ、ラモーに依つて作曲さる）を讀み給へ、然らば諸君は人々が假令ウレミアリラシウテユテユに褒言葉を與へてゐても、そこにはウトミウソルの魅惑的な情景が再び生れて來るであらうと言ふ事が、納得が行くであらう』

それは兎も角として、當時は町中の人々は皆ウトミウソルの悲劇に走り、又ウレミアソラシウテユテユの所作事で窒息してゐた。

その時はバンザで、ウレミアソラシウテユテユの或る立派な作が上演されてゐた。そしてミルゾザがそれを見たいと言つたので、皇帝もそれを見る氣になつたのであつた。併し寶石が時を定めて喋ると言ふことに氣を惡くしてゐたヴアイオリン彈き達は、その爲めに猜疑心に陷り、又主役の女優は拔けて了つた。けれ共、聲は彼女よりも惡いが代りの女優がその役を演ることになつたので皇帝とミルゾザとは、此の芝居を見ることになつた。

マンゴグルが行つた時には、ミルゾザは既に先きに來てゐた。そして幕が上つて、芝居は始められて、萬事が巧く演じられてゐた。『騎士』は『ル・モール（十人世紀中葉にパリのオペラ

に名聲を唱はれた女優)』を忘れさせて了つた。丁度第四幕を演つてゐる時、餘りいつ迄も續けてゐて二度迄もミルゾザに欠呻をさせて了つた合唱の最中に、皇帝は指環を歌ひ手の皆に廻はして見樣と考へついた。すると舞臺では今迄決して見る事の出來なかつた樣な不思議な喜劇じみた場面が演じられるのであつた。三十人の唱ひ女たちはいきなり默つて了つたが、此の女たちは口を大きく開けたなりで、前にしてゐた樣な芝居のしぐさのまゝぢつとしてゐた。けれ共彼女たちの寶石は聲を嗄(かつ)して叫び出した。或るものは新橋節(ポンヌフぶし)を、或る者は卑猥なはやり唄を、他のものは野鄙な替唄を、等々と彼女たちの行ひに關係したありと凡ゆる奇妙千萬な事を唱ひ出した。さうかと思ふと、一方では

『おゝ、おばさん』とか他の方では

『何ですつて、十二回ですよ、妾に接吻するのは誰れ？　ブレーズ？』

とか、さては、

『シプリアソの父さんぢつとしてゐてはいけません』

といふ聲も聞えて來た。かうした聲は非常に高く、可笑しな氣狂ひじみた調子に上げられて、

今迄には決して聞いた事がなかつた樣な何よりも奇怪な騷々しい笑はずには居られない樣な合唱になつて了つた。

その間中もオーケストラは絶へず奏しつゞけられて、平土間や正面棧敷やボックス等の笑聲は、樂器の音、寶石の歌と入り混つて不調音を作り上げてゐた。

女優たちの或者は自分達の寶石が馬鹿げた事を唱ふのに飽きて了つて、それを喋りはしないかと心配して、樂屋の中へと這入つて了つた。マンゴダルは觀客が新しい事は何事も耳にしなかつたと言ふ事が分つたので、指環を廻はし直した、すると寶石は忽ち默つて了ひ、笑ひ聲も止み、滿場は靜かになり、曲は再び始められ、靜かに終つて行き、幕が降りた。そして皇帝とミルゾザとは歸つて行つた。

此の事件は大きな騷ぎを惹き起した。男たちはそれを笑ひ、女達はそれに就いて警戒し、坊主たちはその事で憤慨し、皆の頭はアカデミーの會員の方へと向けられた。しかしオルコトムは一體それに就いて何と云つたであらうか？　オルコトムは勝利を得た。彼は備忘錄の一つの中で寶石がきつと歌を歌ふであらうと言つた事があつたが、寶石は將に歌を歌つた、そして彼

の同僚たちの頭を腦ませた此の現象は彼にとつては一道の新らしい光明で、確立したのであつた。

第十四章

―オルコトムの實驗した事―

オルコトムがアカデミーで自分の備忘錄を讀み、寶石のお喋りに就いて自分の考へを述べたのは、……日の十五日の事であつた。彼は何度も繰り返へされたが何時も成功を博してゐた誤りのない實驗を一番無難な方法で以つて述べ立てたので、大勢の人たちはそれで滿着されて了つた。聽衆は暫くの間は彼から受けた快い感銘を持續してゐた。そしてオルコトムは六週間の間は、可成り立派な發見をしたものと思はれてゐた。

彼が自分の勝利を確實にするのは、アカデミーに於て、彼が述べ立てた有名な實驗談を繰り

返へしさへすればよかつた。此の問題に就いて召集された會合は、最も素晴らしいものであつた。大臣たちもそれに出席し、皇帝さへも之に臨むことを敢て辭しなかつた。けれ共彼は人目につかないやうにしてゐた。

マンゴグルは獨語の作者であり、當時の會話の輕薄な事は彼をして獨語の習慣に執着させてゐたので彼はかう言つた。

『オルコトムはどうしたつて言語同斷の手品使ひか、仙人か、大馬鹿者かに違ひない。魔法使ひではない學術協會員が生命の無い寶石に言葉を言はせることが出來るならば、俺を守つてゐる仙人は俺との契約に大きな不正を働いたのだ。』

マンゴグルはアカデミーの中央に座を占めて、かうした考へに耽つてゐた。オルコトムは觀察者として、バンザに於て寶石の事件に就いて學識經驗のある人々に就いて起つた事柄を皆知つてゐた。聽衆から滿足を得樣としたならば、聽衆を滿足させる外無いのだが、不幸にして彼の實驗は成功を博しはしなかつた。オルコトムは一つの寶石を取り上げ、それに口をつけて息を切らして吹き、それをおいては又手に取つたりした。それから彼は亦いろんな年代や大きさ

や形や色の寶石を持つて來てゐたので外の寶石にも同じ樣なことをやつて見た。けれども唯聞えるものははつきりしない音ばかりで、彼が述べ立てたものとはすつかり違つた事許りであつた。

それで彼は一寸の間狼狽した樣な風で、ぶつ〳〵口の中でつぶやいたが、氣を落ちつけてから、かうした大勢の人の前でこんな實驗をした事がないと申譯を言つたが、それも成程尤もな事である。

マンゴグルは憤つて立ち上り、室を出て一瞬間のうちにミルゾザの處にやつて來た。

『陛下、あなた樣とオルコトムとは何ちの勝になつたのでございますか』

とミルゾザは彼の姿を見てから云つた。

皇帝は彼女に返事もせずに、室の中を縱横に歩き廻つてゐた。

『陛下は何だか御機嫌がお惡いやうでございますのね』

と彼女は又云つた。

『ああ彼のオルコトムの圖々しいのにはあきれて了つたよ。あの事はもう何人にも言はない

でおくれ。もしも後代の人々が、マンゴグルは武勳を血で贏ちえた勇敢な軍人たちには僅かに四百リーヴル（法――譯者註）しか年金をやつてゐないのに、あんな人間共に十萬エキユも年金をやつたと言ふ事を知つたならば、彼等は一體何と言ふであらうか？　畜生何ていまいましい事だらう！』

マンゴグルはかう言つたきりで默つて了つて、彼女の室の中を歩き續けて居た。彼は頭を下げて往つたり來たり立ち停つたり、時々足をがたゝさせたりした。彼は一寸腰を下ろしてから、だしぬけに立ち上つて、ミルゾザに別を告げ、彼女に接吻するのも忘れて、室を出て行つた。

エルグブゼとマンゴグルの功高く且つ驚くべき事業の歴史を書いて不朽の名を護た彼のアフリカの著者は次の樣な文句を續けて書いてゐる。

マンゴグルが機嫌を害ねてゐることを知つて、人々は彼が國中の學者たちを追放するだらうと考へたが、そんな事は無かつた。翌日彼が起きた時にはいゝ氣嫌で、朝のうちは指環をいぢくり廻したり、夕方にはお氣に入りのミルゾザと一緒に後宮の庭の中に設へられた大天幕の下

で食事をしたり、又國家の事についても少しも忽にしてゐる樣には見えなかつた。

陰鬱な精神を持つた人々、コンゴーのフロンドの黨員（宮廷反對黨員――譯者註）、バンザの探訪記者たちは此の事實をば又問題とするに躊躇しなかつた。そしてかうした人たちは何をしたのであらうか？

彼等は散歩の折やカフエー等でかう言つてゐた。

『毎日手に槍を持つて、夜をテーブルの傍で過すなんて、あれが一體一國の王たるべきもの の仕業であらうか！』と。

『あゝ若しも私が皇帝だつたならば』

と勝負事の爲めに破産をし、妻とは別れ、子供たちはその頃での一番惡い教育を受けてゐる一人の背の低い元老院議員が怒鳴つた。

『若しも私が皇帝だつたならば、私はコンゴーの國をもつと榮えさせるだらう。私は私の敵にとつては恐怖となり。私の臣民に對しては愛となるだらうと思ふ。六ケ月經たぬ間に、私は警察や法律や陸海軍を活動させる樣にするだらう。私は舷の高い軍艦を百隻も造るだらう。我々の土地はもつと開拓され、大きな道路は改修されるだらう。私は稅金を廢止するか、それが出來

なければせめて夫を少くするだらう。我々の如く努力と老年とを人民に正義を賣す爲めに献げた、立派な軍人とか役人とかに對しては厚く酬ひるであらう』

すると一人の齒の拔けた髪の縮れてゐない、肱の處に穴のあいた胴着を着、破れた袖口をつけた年老つた政治家が、ある限りの聲を出してそれにつけ加へて言つた。

『君たちは我々の偉大な皇帝たりレアアデルマレクの事や二千三百八十五年前に國を治めてゐたアビシヤンの王朝の事をもう考へ様とはしないのか。君たちは蝕の豫言をした際に三分の誤算をしたと言つて彼が二人の天文學者を串刺の刑に處したことや、彼の意に逆つて食物を勸たと言ふので、彼が忽のうちに外科醫や、一流の醫者を殺して了つた事をもう思ひ出さないのか？』

更に他の者もそれに次いで言つた。

『そんなら私は諸君に聞きたいが、此の閑な婆羅門の坊主達、つまり我々が自分たちの血で肥してやつてゐる此の寄生虫共は一體何の役に立つてゐるのだ？　彼等が持ち切れない程持つてゐる限りない富も我々の様な正直な人間にこそふさわしいものではないだらうか？』

すると一方でもかう言ふ聲が聞えた。

『今から四十年以前には、新しい料理とか、ローレンの酒等を人々は知つてゐたであらうか？　人々はパゴードの神の怒りと、風俗の頽廢とに伴ふ帝國の來る可き崩解をさし示す奢侈に耽つてゐた。カノグルーの食卓について、厚い肉ばかり喰つたり、アイスクリームばかり食べたりしてゐる時には、人々はどうして切拔細工とか、マルテインの漆細工とか、ラモーの音樂と言ふものにどれ丈價値を置いてゐたであらうか？　オペラの女優でも今日のそれと同じ樣に人間ばなれのしたものではあつたらうが、それでも彼女等には、可成り高い價値がをかれてゐた。皇帝は御覽の通り、多くのものに對して可成り害を與へてゐる。あゝ若しも私が皇帝だつたらなあ』

『若しもお前が皇帝だつたら』

とフオントノアの戰の危險からは身を以て遁れ、而もロウフエルトの戰役に於ては、皇帝の傍で片腕を失つた一人の老軍人が元氣よく返事をした。

『お前はもつと馬鹿な事をするだらう。おい、お前は自分の舌を押へ切れないくせに、一つ

の帝國を治めやうと考へたり、自分の家を治める策も有たないくせに、國家の事に世話を燒かうとするのかい。まあ靜にして、地上の力を尊敬し、帝國に生を享けた事、而も思慮稠密で勇氣凛々とし、敵を畏怖させ、人民を愛撫し給ふ大君の御治世の下に生きてゐる事を神樣に感謝したらいゝだらう。

第十五章

―波羅門の坊主たちの事―

學者たちが寶石の事について、頭腦をしぼつてゐる時、婆羅門の坊主たちも其の事で心を奪はれてゐた。宗教は寶石のお喋りを恰も自分の領分内の問題でもあるかの樣に、それを取り上げ、又坊主たちは之をブラーマの掟が形をとつて現れたものだと主張してゐた。

遂に大司祭たちの總會が開かれた擧句に、一番勝れた文章家たちに言ひつけて、此の事件が

超自然的なものであることを實證させる事を決議し、そしてその事を論文とか、特別な談話とか、魂の教導とか、一般の人に對する說教等の中に入れさせた。

成程彼等は此事件が超自然的なものであると言ふ事に就いては、誰一人として異論を唱へるものはなかつたけれ共、コンゴーに於ては、二個の原則が認められ、マネス教（波斯の善惡二元說の教義――譯者註）の一種が公然と信奉されてゐたので、寶石のお喋りを批判するにも、彼等の間に自ら說が分れた。

修道者の密室から決して出ない人達や、決して書物を翻いた事のない人達はその怪異をアラーマのせいにしてから言つてゐた。

『自然の秩序を破り得るものは唯彼のみである』

之とは反對に、寢室に出入したり、自分達の室にゐるよりも、貴婦人の私室の方に多く姿を見受けられる人達は不謹愼な寶石が自分達の僞善行爲を曝きはしないかと心配して、寶石のお喋りに就いて、害を有つ神である處のブラーマやその信奉者達の敵であるカダプラを責めてゐた。

此の終りの方の説は猛烈な反對を蒙つて、風俗の改良に就いては餘り直接には影響を與へなかつた。その説を守る人たちでさへも此の事については何とも口出しもしなかつた。彼等は自身の身を庇ふと言ふ事が何よりも必要な事であつたし、又それをやり遂げる爲めにはパゴードやその他の神々に百回でも犧牲を棒げることをも辭さない司祭達だつたのである。

マンゴグルとミルゾザとはきちんとブラーマの宗式に列り、そして國中の人々は新聞によつてその事を知つた。彼等は或る大切な儀式の一つがそこで執り行はれた際に寺に出かけて行つたのであつた。宗法を説明する役を帶びた坊さんは説教臺に上つて、皇帝とミルゾザに對してお經の文句や、挨拶を述べて彼等の倦怠を買ふ上に、色んな寄合に於ての正式の座り方に就いて可成り能辯に喋りまくつた。彼はその必要な事を數の知れない程、澤山の典據を擧げて述べたて、いきなり狂熱的な聖者から感動を受けたかの樣に、次の樣な諄い文句を長々と列べ立てた。

『私は集りと言ふ集りで何を聞くでありませうか？　私の耳を打つものは一つの取りとめのないざわめきであり、未だ聞いた事もない一つの物音であります。凡ゆるものが頽廢させられ

て了つて、ブラーマの御恩惠によつて今日迄に與へられてゐた、言葉を使ふと言ふ事が、彼の罰として他の器官に移されて了ひました。そしてそれは何と云ふ器官でありませうか？　それはあなた方の知つてゐる通りであります。夫はあなた方の様な恥知らずの人達を假睡から覺ませる爲めの一つの變つた出來事なのです。そして大事な器官が、聲を立てさへしなかつたならば、あなた方の犯した罪にも充分な證據と言ふものも無かつたでせうに！　天の怒りは新らしい懲めを求めてゐるのですから、彼等の桝が一杯に滿たされてゐるのは疑ひの無い事であります。あなた方が闇黒の中に姿を隱さうとしても、それは何の役にも立たない事で、闇黒の中で其の犯人を捜さうとしても、それも無益の業です。あなたはそうした事を今お聞きになります か？　彼等はあらゆる方面から、あなたと反對の立場に立つて、あなたの醜さを世界中に發き立てました。オ、ブラーマよ、あなた様はそのお智慧で以つて、彼等をお治めなさいます。あなた様の御意見は公平で、あなた様の捉は搔浚や、背誓や、僞言や不義等を罰します。夫は誹謗の極惡非道や、野心の隱謀や、憎惡の憤激や、邪念の手管等を禁じます。あなた様の忠實な司祭共はあなたの子供等にかうした事實を知らせたり、あなたが裏切り者に對する正しいお怒

りの中に持つてお出でになる罰で以つて、彼等を脅すのを怠つては居りませんが、それも役に立たなくなりました。沒分曉漢共は自分達の本能の趨くまゝに溺れて了ひ、世の遷るまゝに隨いて行き、私たちの忠告を輕蔑し、私たちの脅しを無益なものに取扱ひ、彼等の惡業は益々つのり增して行きました。彼等の冒讀の聲はあなた様のお許に迄上つて行きます、私たちはあなた様が彼等にどう云ふ恐ろしい災厄をお加えになるかを豫言することは出來ないのであります。私たちは長い間あなた様のお慈悲を懇願した後で、あなた様の公平を頌贊致します。彼等はあなた様の懲めにこりて、必ずあなた様の處に歸つて來、そしてお手にすがりつくでせう。彼等はあなたのお力の實現を、自然の細織の盲目的事にかこつけて、心の中で『ブラーマは居ない』と云つてゐました。から言ふ彼等の心持は私たちには不可解なものでありますが、ブラーマの存在と言ふ事に對する新らしい證據となるのは、私たちに反對してゐる其の人々が無智であり輕信をしてゐると言ふ事であります。彼等はそう云ふ風の論據に基いて學說を作り上げ、假說を想像し、實驗をやつて見たりするが、ブラーマは久遠の棲居の高みから、彼等の無益な企てを笑つてゐました。彼は無禮な科學をやつけて了ひまし

た。そして寶石は彼等の饒舌の上にかけられた力の強い轡を硝子のやうに壞して了ひました。そこで彼等はすつかり、自分等の論理の弱い事や自分たちの努力の空しい事を白狀して了ひました。そして彼等はブラーマの存在を否定したり、ブラーマの力に制限をおく事等を止めて了ひました。ブラーマは存在してゐるのであります、而も彼の力は非常に強いのであります。そして彼は筆舌に絶した惠みと同じ樣に、恐ろしい災厄を與へんが爲めに、私たちに對して嚴然と存在してゐるのであります。

併し乍ら一體何にが此の不幸な國にかうした災厄を持ち込んだのでありませうか？　それは決してあなた樣のお考へ違ひではなく、全く、男たちは信仰を持たず、女たちは羞恥心を忘れてゐるが爲めなのであります。

そして此の苦難にとりわけて蔽はれてゐるあなた方、つまり放縱に陷ち込んで了つた奥さんや娘さんたちは、私たちがあなた方の亂行について堅く沈默を守つてゐるのに、あなた方は私たちよりももつとうるさい一つの聲を持つてゐて、それに引つ張られて行き、そして特に其の聲はあなた方の不純な慾情とか、嫉妬の恐ろしさとか言ふ事に就いてあなた方を責めてゐる。